

八重山で共に暮らす島人を撮影したシリーズ。
暮らしの中から見つめる被写体に共感と敬意を
込めて撮影している。



天願恵子さんが働く(有)大喜産業大川店(社長・呉屋芳徳、呉屋喜美子)の「やおやさん」には、恵子さんのお母さんの代から通って来る年配のお客さんから、最近近所に移り住んできた人、観光で島をおとずれている人、そして私のように離島の島々から石垣島に通って来る年齢も暮らす場所もさまざまなお客さんたちが毎日途切れることなく買い物にやってくる。

私は、時折り夕飯のおかずの刺し身や豆腐などを買いにフラリとお店に立ち寄る。お店で繰り広げられるその日限りのお店の人とお客さんたちの会話がたまらなく好きで、買う物を選ぶふりをして、必要以上に長居するのが私の密かな楽しみだ。赤いポロシャツのユニフォームが似合う恵子さんは、程よい間合いで声をかけてくれたり、他のお客さんに近所のニュースを提供したりしている。

恵子さんが3歳の頃にご両親が始めたこのお店を彼女は、「大切で大好きな場所」だという。まだ高校生だった頃にお母さんが病気で他界してしまい、夕飯の作り方は常連のお客さんが買い物に来ると、「これとこれで、どんな料理を作るの?」とレジカウンター越しに聞き、試して作ってきたそうだ。美味しくできると、次は自分が買い物にくるお客さんに作りかたを教えたりもしている。

「恵子さんの人生はずっとこのお店と共にあるのですね」と私が言うと、「そうね、お店に来るお客さんや業者さんたちが私を育ててくれたようなものね」と言い、一呼吸おいてから「私は、すべての人に幸せになる権利があると思うの。どんな人生でもね、みんな平等に幸せになる権利。それをこのお店で少しでもお手伝いできたら良いなと思っているの」と少し照れたような口調で話してくれた。

お店の前で恵子さんを撮影していると、お母さんの代からの常連さんが、「そっくりなのよ、この人、お母さんに」と私に嬉しそうに声をかけてからお店に入って行った。

水野暁子 みずのあきこ

1973年千葉県に生まれる。1986年に家族とアメリカへ渡る。1996年 School of Visual Arts (New York) を卒業。1999年に竹富島に移住。現在子育てをしながら撮影活動中。

●島人へのインタビューをまとめて紹介している YouTube チャンネル「八重山ライブラリー」も。